

# 建築から見る 宇津ノ谷

多くの東海道沿いの町や集落では、近代化とともに、昔の建物や景観が失われていきました。そうしたなかであって宇津ノ谷集落は、旧東海道全体を通して見ても、江戸時代以来の町のつくりと建物が残った貴重な場所です。集落では昔ながらの景観を、かけがえのない資源ととらえ、これを保全、発展させることとしたのです。街道沿いの町のつくりは、そのまま保存されることになりました。一部の建物は建て変わりましたが、古い建物の改築や修理の際に昔ながらの工法や材料を奨めるなど、景観に統一感を持たせるよう努力がなされています。



## 歴史的環境をつくる

私たちが現在目にするのできる宇津ノ谷集落の景観は、残された道や建物をもとにして、それを受け継ぎ、少しずつ手を加えながら維持されてきたものです。昔ながらの景観が持続するというは、いつの時代もそれを大切に思い、手をかけてきた人々がいるということです。宇津ノ谷集落では、道路や建物、外構の修景に加え、昔から各家で呼び習わされてきた屋号を看板のように掲げることで、かつての街道沿いの街並みを再現し、歴史的環境をつくりだしています。

## 1. 切妻屋根、平入の町家

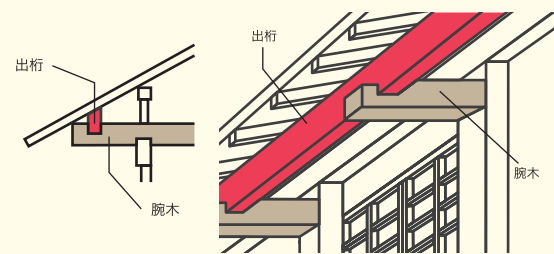
宇津ノ谷集落で見られる伝統的な民家は道路と建物

の間に空間がない町家です。江戸時代、街道沿いの民家は原則的にこの形式でした。屋根は頂部(棟)が一直線になる単純な山形の切妻造りです。入口は屋根が降りてきた下部に設けられ、これを平入りといいます。側面には屋根の形を示す三角形の面(妻面)が現れます。妻面に入口がある場合は妻入りといいます。東海道の町家はほとんどが平入りでした。

## 2. 出桁(だしげた)造り

出桁造りは軒を伸ばすためのしくみです。屋根裏や柱から腕木を出して、その先端に桁(けた)をのせて屋根を支えます。ガラス戸のない時代には障子に雨が当たっては困ります。土や板の壁に雨が当たると建物も傷みます。夏の日差しを避けて快適な室内をつくるた

めにも、軒下を深く差し出したのです。出桁造りはせがいが造りとも呼ばれますが、せがいは和船の両舷に渡した板のことで、軒を出した形が似ていることから、この名前がついたといわれています。



## 3. つし造り

つし造りはつし2階とも呼ばれ、屋根裏に部屋を設

けたものです。江戸時代には本格的な2階建の建物を造ることは一般に許されず、平屋と同様の構造で屋根裏部屋をつくりました。外観は1階と2階の屋根の間に、つしの小さな窓が開きます。限られた空間を使うために、小屋組(屋根の骨組)は登り梁や曲がり梁を使い、棟通(屋根の頂部)を前にずらして道路側の壁を高くするなどの工夫をしています。

